である、どうして超然として内證の喜びにのみ耽つて居られやう、幾度か國を思ひ煩ふ心は靜かなる内證の奥殿を脅かした、さうして九ヶ年の生活に悲痛ある影をつくつた、此の九ヶ年に物せられた書翰や著述の中から、さうした影と光りが溶けあつた生活の響きを聞く事が出來る、死期を知つて山を下り池上に行かれた事も、其處で入滅の日までも立正安國論を講ぜられたのも、此の哀しい半面の事實を語るものでは無からうか、日昭上人に依つて叩かれた臨滅度時の鐘の音は聖者を失ふ大衆の悲しみと、盲ひたる者を後に殘す聖者の悲しみとがもつれあつて今猶其の餘韻は流れて居る

あゝ吾等、六百年前時相隔たり月かはると雖も幸ひにも遇ひ難き聖祖の法流に浴し得たる喜びに吾が力の限りを盡して正法護持の爲に努力しなければならぬ。

人生僅か五十年七十古來稀あり、而も人は何事かの爲に死せざるを得ない、戰か、政治か、飢か病か、戀か、慾か、災難か、壽命か、何れにか死ぬる命である、同じ捨つる命を敎法の大義に捧げる世にこれ程の高い淨い行動があらうか。

散歩

中一　木村智德

足の向ふまゝにぶら〳〵と下町を下つて行く内にいつか總門前迄來た、午後からどんよりと曇つた空には灰色の雲が重あり同つて浮動しつゝある時々初秋の爽さを含んだ涼しい風が肌へをさすつて行く毎に四邊の木や草が淋しく搖られ、道側に咲いて居る薄や、刈萱や、女郎草等の秋草が物哀れある秋の氣分を漂はせて居る。炎熱烈しかつた盛夏はいつか過ぎて全く秋の天地となつて居る事を急に感ぜずには居られぬ。遙の彼方には青い山々が幾重にも續いて、頂さにはぼんやりと白雲がかゝつて見える。あれ等も甲州一帶の連山かと思へば他所ならぬ感じがする、すぐ目の下は身延川を超えて梅平の田園が一面に展げられ、三四軒の農家が散在して居る樣は繪のやうでもある。清い水が

岩に碎けてどう〳〵と音をたてつゝ絶えず流れて居る、此の水が波木井川と合して富士川へと流れ込み、そしてあの名だたる急流の亦勢を增すの一分となり、流れ〳〵て終に駿河灣へと注ぐのだが思へば水の源は何れも一滴の水に外ならぬ、然し其の一滴の水が絶えず噴湧して止まず遂に流れ集まつて彼の大を到すのだ。僕は自分の學事に思ひ到つて、我々の今の勉强も一句一章一事一科と些細の歩を運んで止まぬ時、遂にそれが集り積つて人格の大成を來すのである。只水は自然に湧いて流れるが吾等は自分で心に鞭うち努めて其の大を來たさねばならぬとを今更に感じた。

川に沿ふて三四軒ある水車小屋を過ぎり、いつの間にか梅平へと出た。山手の方から薪を負ふた女が二人後から僕を追越して、さつさと行き過ぎたが、僕は思はず勞働は神聖なりと心の中で叫んだ。彼の女等の姿はやがて穢しい暗い家の裏へ隱れた、あれが彼女等の住家なのだらう。足る事を知り勞役を樂む者に取つては賤ヶ伏屋も金殿玉樓であると云ふが、彼等はそう思つて居るかどうか遠くから馬車屋のヲッバの音が響いて來たので氣が附いて四邊を見廻はすと、漸く薄暮に近づきつゝあるので急ぎ元來た道へ足を還した。

友人の喪を悼んで

中四　松澤嘶馬

嗚呼將に蕾を破り複雜なる社會に立ち大なる自我を實現し生きては一世を風靡し、死しては千歲の後までも芳名を竹帛に垂れんとする親友、君よ君はさぞ世は無情である、人生は悲哀であると日夜天地宇宙の無限なるに反して、人生の有限なるを思ひ憂愁に堪えぬらん。而し君は彼の涅槃の彼岸に到達して此の混沌たる社會を眺め深き思ひに耽るやらん。君は將に蕾を破り暗冥に充ち滿されて居る、社會人類延いては國家を救濟し人生の花を咲かせ黃金を身に纏はんとせしに如何せん、天命此處に盡きたりしか、或は惡魔の襲ひしか、君のあの偉大なる天才を發輝せず、煩悶悲哀の中遂